

大会発表報告

家族再統合支援 ～ケアワークの立場から～

大沢汐里 湯田香菜 川嶋慎也 向井広香
市川理紗 諸岡翔太 中村隆斗
(児童養護施設 東京育成園)

抄録：児童養護施設入所児童にとって、「家族」や「生い立ち」に関する話題と日々の過ごしは切り離せないものであるが、ケアワーカーは生活の中で家族の話題を取り扱う困難さを感じている。そこで本研究では、当園の記録システムから家族に関する話題が出た際の記録を抽出し、子どもの気持ちの状態を安定・不安定と定義付け、支援によって状態が安定した支援技術を明らかにすることを目的とした。研究対象は、当園でファミリーソーシャルワーカーが稼働した2009年度以降、3年以内で家庭復帰した10ケースである。その結果、子どもの特性やケースの状況、再統合に向けた交流の進捗による子ども気持ちの揺れや状態によって変わってしまうことから、安定・不安定の定義付けは難しいと結論が出た。今後は、定義付けは行わず、子どもが不安定な状態と判断した語りを抽出し、ケアワーカーが支援したことで安定となった支援、支援しても不安定のままであればどのような支援方法が有効的なのかを研究する。

キーワード：家族再統合、家庭復帰、ケアワーク

1.はじめに

児童養護施設東京育成園（以下、当園）とは、東京都世田谷区にある児童養護施設である。本体施設5ホーム、グループホーム6ホームで運営しており、児童の配置は男女混合縦割りで、本体施設は6名～7名の小規模グループケア、グループホームは定員4名の児童で生活している。

当園では、職員の「専門性の向上」の具現化として、2011年度からワークショップを立ち上げた。研究期間は3年で1期とし、今期は第5期の取り組みである。職員を専門領域や部門にとらわれず、複数のグループに分かれて研究活動を行っている。また、各グループの研究テーマは、当園における日々の実践の中から身近な課題を中心に、職員に対してアンケートを実施することで決定している。本研究は「家族再統合」をテーマとしたグループによる取り組みである。

家族再統合グループは、ワークショップ第1期から続いているテーマである。第1期では当園における家族再統合の展開過程をインテークからアフターケアまでを追いかけ、それぞれの時期の達成目標や実際なされている支援について研究し、体系化した。第2期では、関係機関との連携に着目し、事例検討をもとに再統合過程における各機関の機能を検証した。このように、第1期、第2期と「ケースワークの視点」から研究を進めてきたが、第3期は新たに、「ケアワーカーの視点」による家族再統合支援について研究を進めた。

さらに第4期では当園のホーム担当職員による過去の支援事例をもとに、家庭復帰に向けて揺れ動く子どもの気持ちと、そこに寄り添うホーム担当職員の支援を明らかにした。また、子どもを「幼児、小学生、中学生」と年代別に考察することで傾向や共通点を見出した。その結果、各年代に共通してみられた支援方法は、①情報収集、②安心感を伝える、③素直な感情表出の促し、④理解の確認や促し、⑤家庭復帰を見据えたサポートである。特に幼児に対しては、お祈りやスキンシップなど幼児の理解度を考慮した非言語的な支援が多い傾向にあった。小学生に対しては、子どもの気持ちや希望を引き出す関わりが多くみられていた。中学生に対しては、1回1回のやりとりに時間をかける傾向があり、特に就寝前などの個別に関わる時間を活用した支援に重きを置いていることが明らかとなった。また、支援のプロセスを図式化すると、子どもたちに安心安全な生活を提供し、気持ちに寄り添いながら励ますホーム担当職員の関わりが、子どもたちの施設での生活の基盤となっていることが分かった。その上で必要に応じて理解の確認や促し、家庭復帰を見据えたサポート等を行うことで、子どもたちが安心して家族の元に戻れるよう、様々な方法で支援を行っていることが明らかとなった。

第5期では第4期に引き続き家族再統合を「ケアワーカー」の立場から取り組む価値について着目した。児童養護施設で生活する子どもたちにとって、「家族」や「生い立ち」に関する話題と日々の過ごしは切り離せないものであり、言語化や表面化せずとも、子ども一人ひとりが何らかの気持ちを抱いているのではないかと想像する。また、その気持ちは日常生活においてより表面化され、子どもと生活を共にするケアワーカーこそ、一番近くで感じ取り、支援に繋げられるのではないかと推察したからである。

第1期から第4期を通して様々な家族再統合のあり方を目の当たりにした中で、専門職として「建設的な取り組み」をしていくことが求められていると再認識した。前期の研究結果からケアワーカーの困り感として、子どもの状態を判断できないことが明らかとなり、子どもの状態に対して安定あるいは不安定かの定義づけをする必要性があると推察した。

ケアワーカーが日々子どもたちと関わる中で、家庭復帰に向けてどのような支援ができるのか。また、生活の中で家族の話題を取り扱う際に直面する支援の難しさ・困り感をどう解消し、支援に繋げていけばよいのか。こうした現場の声を原点として、家庭復帰に向けてケアワーカーに必要とされる援助技術を明らかにし、効果的な家庭復帰支援を見出す

ことを目的とする。

今期の研究では子どもの状態に対しての安定・不安定の定義づけを行うとともに、家族の話題を取り扱う際の不安定な状態に着目し、子どもの安定につながるためにはどのような支援が有効的か、より詳細に分析する。

2. 研究方法

研究方法は以下の4つである。

- ①家族について語っている子どもの状態を安定・不安定と分類
- ②家族に対する不安はどのような状態で表出されているのか3歳から6歳までの幼児、6歳から12歳までの小学生、12歳から15歳までの中学生に分類し分析
- ③安定・不安定の定義付け
- ④職員の支援方法について分析

1) 対象ケース

第5期の研究対象は、第4期で選定した「当園でファミリーソーシャルワーカーが稼働した2009（平成21）年度以降、3年以内で家庭復帰したケース」とした。

ポイントとなるのは2点であり、1点目はファミリーリーソーシャルワーカー（以下FSW）配置の背景である。施設で生活する子どもたちにとって、家族関係にまつわる課題を解決し、家庭復帰を実現することが大きな目標であることは変わらないが、「2000年の児童虐待の防止等に関する法律」の施行と前後して、全国的な虐待相談件数の増加に伴い、児童相談所がパンク状態となった。その結果、受け皿である児童養護施設は単なる子どもの養育機関としてだけではなく、生活をベースにソーシャルワークを実践する機関へと変化していくことが求められた。FSWが配置される以前は施設が明確に家庭復帰への方針を定めて、計画的に日々の支援に取り組むまでには至らなかった現状があった家庭復帰ができるかどうかは児童相談所、さらに言えば児童福祉司次第という状況だった。しかし、児童養護施設へのFSWの設置が定められた2004年度以降、本来は児童相談所の専門領域であったソーシャルワークを、施設も主体的かつ足並みをそろえて実践する「取り組みの結果、家庭復帰が実現する」という流れに変わっていったのである。

2点目は当園では入園後3年以内での家庭復帰を目標としている。これは、入園後概ね3年が親子の家庭復帰に対するモチベーションを維持できる目安であること、さらに、子どもの権利条約にある「親の元で育つ権利」を実現することにも関係していると言える。

よって、これに該当した35ケースのうち、正確に家庭復帰までの流れがわかる記録が残っているもの、さらに年齢や性別のバランスを考慮して、10ケースを対象とする。

2) 安定・不安定の分類付け

当園では子どもたちの日常生活の記録を保管するためのデータベースとして子ども支援

記録システムを導入している。システムの中には子どもたちの日常生活、家族とのやり取り、他部門との連携などカテゴリーごとに分類し、記録している。第4期では子ども支援記録システムを利用し、対象ケースの中から家族の話題を取り扱った内容を抽出した。第4期で抽出したデータをもとに当グループメンバーで経験年数が均等になるようにペアを組み、抽出した内容を安定・不安定と分類付けを行った。分類した結果をグループメンバーで共有し分析を行った。

3. 研究結果

<幼児の傾向>

○安定している時

- ・泣かずに話をできる。
- ・言語化できている。

○不安定な時

- ・泣いているとき無理に涙を我慢している。
- ・措置の理由を含め自分の状況を理解できていない時に多い

傾向にあった。しかし、幼児が涙を流すことは成長過程において必要なことであるため泣いていることを全て不安定にしてしまっていいのかと感じた。

<小学生の傾向>

○安定している時

- ・自身の置かれている現実を捉えられたとき。
- ・自分の意思や考えを揺らぐことなく話をしている。

○不安定な時

- ・両親を理想化しているとき。
- ・親による虐待行為や自身の問題行動、環境面など措置前の状況を理解できていない。
- ・児童養護施設への入園後に飛び出し等行動面に問題がある。
- ・年齢不相応の身体的なケアを求めている時に多い。

傾向にあった。しかし、不安定で挙げた身体的ケアを求めるることは、ケアをして欲しい気持ちは不安定に繋がるが、ケアを求められることは安定と捉えられているのではないかと感じた。

<中学生の傾向>

○安定している時

- ・他者の意見に惑わされず自分の意思が揺らがないとき。
- ・担当職員あるいは養育者と建設的なやり取りをしている。
- ・気持ちの言語化ができている。

○不安定な時

- ・気持ちの言語化できない。
- ・涙をながす。
- ・他者の意見に同調し自身の意見がまとまらない。
- ・一時帰宅後はよく不安定になってしまうことが多い。

傾向にあった。しかし、涙を流すという感情表現できている点を不安定にして良いのかと疑問が残った。

研究結果として安定・不安定の定義付けが難しいことが明らかとなった。そのため、当初予定していた研究方法では④職員の支援方法の分析は難しいと判断した。

4. 考察

抽出した記録から子どもたちの安定・不安定の分類を行った結果、子どもの特性やケースの状況、再統合に向けた交流の進捗による子ども気持ちの揺れや状態によって変わってしまうこと、第三者が抽出した記録を客観的に見た時と記録を書いた当事者では感じ方が異なることから、安定・不安定の定義付けはしづらいと考える。その結果、個々の特性やケースの状況や異なる中での安定・不安定を定義付けるのは難しいと結論となった。また、子どもと振り返りなどで過去の話を取り扱っている際は、子どもが安定していることが多く、将来の展望や子どもの希望などを扱う未来のことは不安定となりやすいことが推察された。

考察をしていく中で、職員との関係性によって子どもたちの表現方法が変わること、子どもが職員と関わりを通して不安定になれるタイミングに不安定になれることがその後の子どもの安定につながる支援であること、家族の状況や将来の展望を理想化してしまう子どもが、諦めざるを得ない状況に直面し、不安定になることは普通ではないかと、安定・不安定だけでは表すことのできない子どもの状況が改めて考えることになった。

今回の研究結果から安定・不安定を定義付けることは難しく、定義があることによってケアワーカーの視野が狭くなり支援の邪魔をしてしまうのではないかと考察する。

5. 今後の課題

今後は子どもが不安定な状態と判断した語りを抽出し、ケアワーカーが支援してどのように子どもたちが変化したのか、またケアワーカーが支援し安定となった声掛けは何か。ケアワーカーが支援しても不安定のままであればどのような支援方法が有効的なのかを研究していく。これらの研究からケアワーカーによる効果的支援を見出し、実際の生活の場で活用していくことが出来る研究結果に繋げていきたいと考える。